「創立五十年紀念慶應義塾図書館」の百年

鳥居（とりい）　泰彦（やすひこ）
（慶應義塾学事顧問）

鎌田栄吉塾長時代に三田の旧図書館を建設してから 100 年になる。それを記念して，創建当時の事を回想する催しを三田で挙行するに際して一文をしたためることを求められた。たまたま，目下執筆中の慶應義塾の回想についての拙書の中から，それに該当する部分を抜き出して責めを果すこととする。

大学の心臓　図書館

創立 50 年を記念して鎌田塾長が建てた図書館は，「旧図書館」の通称で呼ばれる三田のシンボルである。正式の名称は,「創立五十年紀念慶應義塾図書館」である。レンガ造りの洋風建築の第一人者曾禰達蔵と中條精一郎に設計を依頼，花崗岩の土台の上にレンガのゴシック建築で，本館は地下 1 階地上 2 階，向って左隣に 6 層建ての書庫と，向って右側に 4 層からなる八角塔が附いている。最初に収蔵した図書は 20 万冊，閲覧席 250 名，当時としては画期的な図書館であった。

義塾創立 50 年にあたる明治 40 年に募金を始めて，着工までに 36 万円の寄付を集めた。鎌田栄吉全集の回想文によると，評議員会では，せっかく 36 万円も集まったのだから, 図書館は木造にして, 余った資金で工学部を造ろうという案もあった。しかし，鎌田塾長は，図書館はどうしてもレンガ造りでなければならない，工学部はいずれ造る，と押し切ったという。建築費が 17 万 5,000 円, 図書費に 10 万円をあてた。(編集部注：『慶應義塾学報』によれば，集まったのは 36 万 4 千 5 百余円で，内訳は工費に 20 万円，設備に 3 万円，雑費に 1 万円，記念図書購入に 1 万 5 千円とある。) ちなみに当時の義塾の年間経常支出が 8 万円であった。年間予算の 4 倍の費用をかけて創った「大学の心臓」である。この決断をした鎌田も立派だが，それを議決して募金を完遂した評議員会も立派である。

明治 42 年 6 月に着工，安礎式は（定礎と呼ばずに安礎と呼んだ）明治 42 年 11 月 23 日，それから 2 年 5 カ月をかけて, 明治 45 年 4 月 15 日に竣工した。その 3 カ月後の 7 月 30 日に明治時代は終わり, 元号は大正となった。

あの図書館の閲覧室での心落ち着く読書を経験した世代は, 昭和 50 年代末の卒業生の世代が最後であろう。私の記憶では，旧図書館は昭和 57 年に新しい図書館にその座を譲った。旧図書館は明治 45 年即ち大正元年から昭和 56 年まで 70 年間慶應義塾の心臓であり続けた。外観も内容も，蔵書と閲覧室のしつらえも，いずれも時代の先端を行くものであった。現在は重要文化財に指定されて，文明の最先端を走ってきた慶應義塾の象徴であり続けている。

創立五十年紀念図書館の安礎式は明治 42 年 11 月 23 日に行われた。安礎式では社頭福澤一太郎が，続いて塾長鎌田栄吉が式辞を述べた。礎石の花崗岩には「明治 42 年 11 月 23 日安礎」と刻み，礎石の下に小さな隙間を開けて，鉛製の小箱を置き，その中に『慶應義塾五十年史』, 50 年祭絵葉書, 50 年祭参列メダル，当日の『時事新報』の 4 品を入れてガラスの蓋をした。

社頭福澤一太郎は，この安礎式の冒頭，重要な事を述べた。「福澤諭吉は，慶應義塾は一個人のものでなく，社中全体の共同体のものでなければならないと言ってきた。現在法律上においては，この三田の地所も福澤家の所有であるが，諭吉の遺志を遵奉するならば，これは我が家において私有すべきものではない。この三田 2 丁目 2 番地の土地と家邸を法人としての慶應義塾に移管して，願わくは 500 年，5,000 年の将来を保つことを希望し, 諸君の同意を得たい。」という趣旨であった。

かくして，創立五十年紀念図書館は，福澤家の私有地を移転登記して，法人としての慶應義塾が所有する土地の上に建てられた建物の第 1 号となった。

ファサード（玄関）上部には篆刻家山本拝石の書で，岩村透が自ら銀座天賞堂に鋳造させた「創立五十年紀念慶應義塾図書館」の文字が掲げてある。この書が拝石の絶筆になった。書庫の外壁には花崗岩で造った丸い外輪の中に，白藍褐色のラテン文字で TEMPUS FUGIT の 11 文字で時計が造られた。「時は流れ行く，光陰矢のごとし」のラテン語である。

最後の 12 時は, 文字の代りに砂時計の形の彫り物が嵌め込んである。

内部の 1 階の正面階段の大きなステンドグラスは, 竣工から 3 年後の大正 4 年 12 月に取り付けられた。和田英作（明治 7 年～昭和 34 年）による原画, 小川三知の制作である。封建制（武士社会）を象徴する武士が馬から降りて，文明の女神に相対している図である。下の部分にラテン語で Calamus Gladio Fortior（ペンは剣より強し）の文字と，創立の年の「1858」と創立 50 年記念の年「1907」が記してある。昭和 20 年 5 月の空襲で焼失したものをのちに復元した。

五十年紀念図書館の明治 45 年 5 月 18 日の竣工式のことは，各新聞が報じた。三田通り商店街は戸毎に軒燈と塾旗を飾って祝った。竣工式では，鎌田塾長に続いて，紀州家当主徳川頼倫（よりみち）の祝辞，徳川宗家 16 代当主徳川家達（いえさと）の祝辞（図書館長田中一貞代読），日本図書館協会長西村竹間祝辞，社頭福澤一太郎謝辞と続いた。

かくして開館した三田の図書館は，毎日午前 8 時から午後 9 時まで一般入館者にも公開した。(但し日曜の夜間のみ閉館）この一般にも公開する原則は今も続けられている。

月波楼のこと

「旧図書館」の敷地に選ばれた辺りは三田の山の東北の角で，階段（幻の門）を上ると右側に三田春日神社がある。芝新銭座から引っ越した当初の頃は(慶應 4 年，明治元年),「センセイ」という文字が地図に示されている。福澤先生の邸が出来るまでの短期間, 先生の仮住居がそこにあったのではないかと想像される。その後福澤邸は三田の東南の角，現在の福澤庭園の場所に「西洋造」で建てられた。

春日神社の隣の土地には,「書物売捌所」と石造の書物蔵が建ち，それを囲むように朝吹，森下，和田等の家が点在したらしい。それらをにらむように, 大きな小幡篤次郎邸が建っていた。小幡の家の東の角に，中上川彦二郎の家があった。「書物売捌所」に, 一時期「衣服仕立局」という女子職業教育の学校が同居したが，短期間で終わった。(早矢仕有的の丸屋商会に売り渡された。)「書物売捌所」は，明治 5 年に慶應義塾出版局となり，明治 7 年には合資会社「慶應義塾出版社」となった。明治 14 年の政変の後，明治 15 年に，慶應義塾出版社から「時事新報」を出版することにした。翌年明治 16 年に「時事新報社」を設立して，日本橋に社屋を構えたが，交詢社と同じ場所の方が便利ということであろう, 明治 19 年に銀座 6 丁目の交詢社に移った。

元々，慶應 4 年に慶應義塾が芝新銭座から三田に引っ越した時，三田の土地は旧島原藩藩主松平主殿（とのも）の屋敷であった。松平主殿という殿様は, 三田の丘の上から江戸湾の海を眺めるのが好きで, 屋敷の一部に望楼を造っていた。この望楼を「月波楼」と命名していた。月波楼は現在の大銀杏の樹の近くに建っていたと思われる。福澤諭吉が松平の殿様から三田の丘を譲り受けて，塾生が暮らすようになってからも, 月波楼はしばらく建っていた。(『慶應義塾史事典』に写真が掲載されている。)

創立五十年紀念図書館の正面のファサードに向かって右に八角塔がある。昔は八角塔がこの建物の中で一番目を引く存在であった。今は大きなヒマラヤ杉が目隠しになって，八角塔に気付かない人もいる。

その八角塔の最上階は，今では資料の置場になっているが，昔は小さな談話室になっていた。当時の塾生たちは明治の初めを懐かしんでこの部屋を「月波楼」と呼んでいた。「月波楼」という横書きの額がかかっていた。左下に木堂という落款があった。犬養毅（木堂）の揮毫である。

「月波楼」の額は昭和 20 年の空襲で焼失した。旧図書館開館 100 年を記念する祝賀会に出席した折, この話をしたところ,「あの月波楼の額はみつかって，今は図書館長室に保管しています。ただし落款は木堂（犬養毅）ではなく，竹堂（鎌田栄吉）です」とのことであった。その後図書館の調査で，昭和 2 年 12 月 29 日の三田新聞に，犬養揮毫の額の写真が掲載されていることがわかった。犬養木堂とは別に, 図書館建設を決断した鎌田栄吉塾長も「月波楼」の扁額を揮毫していたのであった。

断章　図書館の 150 年

慶應義塾が創立されたのは 1858（安政 5）年。それから 10 年目が明治元年，その年は最初は慶應 4 年であったが，9 月 8 日に改元されて明治元年となった。その慶應という字を取って，慶應義塾と命名された。

さらに 10 年後の明治 10 年には，西南戦争が起きた。西南戦争で日本中が大不況となり，慶應義塾もまさに危機に瀕した。この西南戦争の年には，福澤先生は慶應義塾のために，資金調達のために歩き回っている。創立 20 年の記念式典をこじんまりとやった。たいした記録が残っていないほどこじんまりとした 20 周年の式であった。あまりにこじんまりとしたのが気になったのか，次の年の正月に福澤先生が改めて，慶應義塾はどうあるべきかという演説をした。

慶應義塾が創立何年という周年式を今まで何回挙行してきたか。創立 20 年(明治 17 年)，その次が 50 年（明治 40 年），その次は 75 年（昭和 7 年），90 年（昭和 22 年），創立 100 年（昭和 33 年），そして 125 年（昭和 58 年），150 年（平成 20 年）と，祝ってきた。

福澤諭吉の在世中には，周年式典は 20 年目の 1 回しかない。明治 10 年の創立 20 年の記念式典だけである。福澤先生は明治 34 年に長逝したので，創立 50 年を見ないで逝ってしまった。福澤先生にとってはそのことが気がかりだったと思う。

明治 30 年に塾長の交代があった。鎌田塾長の前の塾長は，小泉信吉（のぶきち）だった。小泉信三先生のお父上である。鎌田栄吉が，その頃社頭であった福澤諭吉に呼び出されて,「君がこのあとの塾長をやってくれ」と言われた。

鎌田先生は和歌山の紀州徳川家の家来で，お殿様の徳川頼倫がこれからヨーロッパに勉強に行くその御伴をしなければならないので，1 年猶予を下さい，ということになった。そこで明治 30 年の 7 月から翌年 3 月末まで 1 年弱，福澤諭吉社頭が塾長を兼任した。

鎌田先生は明治 31 年 3 月から大正 11 年まで塾長を務めた。鎌田塾長時代の 10 年目，明治 40 年，慶應義塾の創立から 50 年の年に，あの図書館を建てようということになった。

第 2 次世界大戦の最終段階，あと 3 ヶ月で敗戦という，5 月 25 日の大空襲で，図書館は焼夷弾の直撃を受けた。屋根が焼けて鉄骨が残った。

大講堂も，同じ日の空襲で壊滅的な被害を受けた。大講堂は瓦礫の山となった。その瓦礫の山を取り片づけることも出来ず，昭和 31 年から 32 年までほっておいた。我々の入学式や卒業式は，大銀杏の前の広場で行った。

懇親会で歓談する鳥居泰彦学事顧問（右）と図書館新館設計者の槇文彦氏（左）

図書館のほうは，2 年後の 22 年から改修工事を始め，昭和 24 年には改修工事が終わった。日本の戦後復興の歴史の中で，一番復旧の早かったのは三田の図書館ではないか。

そういう姿を見ながら我々は創立 90 年を祝った。創立 90 年という中途半端な年に創立記念日を祝ったのは，昭和天皇の御意向で，焼けただれて廃墟となった慶應義塾を，御自身が行って確かめたいということだったと伝えられる。徳川家の御子孫，塾生徳川泰國君（この人は後に神父になった）が，昭和天皇様にお話をされたことに応えられたと語り伝えられている。

ところが天皇陛下の行幸を仰ぐにも，そういう部屋が無い。そこでやむを得ず，焼け残った第 1 校舎の入口の所に大銀杏の広場に向けて木造のお立ち台を造り，陛下の御言葉を賜った。

1978 年(昭和 53)年に，私たち何人かに集まれと，石川忠雄塾長からお声がかかった。「君らの考えている図書館というのは，どんな図書館か構想をまとめて下さい」ということであった。

最初の案を，予算にしてみると約 20 億円であった。ところが，次から次へと物の値段が上がって行った。この年は第 2 次石油ショックの年であった。どんどん上がって行って，結局我々の頭の中で考えた図書館は 48 億円になった。

今，慶應義塾の正史を見ると，35 億円かかった。そういう時代を経て現在の新図書館ができた。いろいろ勝手な事を設計の槇先生にお願いした。図書館のエントランスは最初は，福澤庭園の側についていたが，それを中庭に近い所に変更して頂いた。1 階の

窓は大きくして中からも外からも学ぶ学生の姿が良く見えるようにした。1 階から 2 階の階段は出来るだけ広くして頂いた。

その図書館に，私が塾長であった，1996 年にニューヨークのクリスティーズで落札したグーテンベルク聖書, 世界に 48 部残存しているグーテンベルク聖書の 1 冊を購入した。ロスアンジェルスで亡くなったエステル・ドヒニー伯爵夫人の蔵書である。エステルはドイツ移民の娘であったが，エドワード・ドヒニーと結婚して富を得た。カソリックの熱心な信者としての活動が認められて，法皇ピオ 12 世から教皇伯爵（Papal Countess）の爵位を授けられた。義塾がグーテンベルク聖書の所有者になったことを祝福して，大英図書館や米国スミソニアン博物館やハーバード大学がお祝いの手紙を送ってきた。

私たちは幸せであった。あの心落ち着く旧図書館での読書を，青春時代に経験することのできた世代は真に幸せである。同じような幸せな読書の世界を，これからも慶應義塾が受け継いでいってほしい。大学の心臓を大事にしていってほしい。

（本稿は, 式典での祝辞にテープ起こし原稿をもとに，加筆・修正をお願いしたところ，改めて書き起こし原稿を頂戴したものである。）